

地域史の時空間表現 —千代田区番町・麴町地区を対象として—

坂元 泰平¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, Email: taihei.sakamoto.7z@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, Email: fukui@hosei.ac.jp)

地域の歴史文化に関する情報は地域史の研究者が時空間の中で統合し、構造化して把握していると考えられる。しかしそうした把握に至るには時間がかかり、容易に理解することが困難である。歴史的情報をGIS上に展開整理することでそうした構造を可視化し、地域史の構造を広く共有できると考えられる。

本研究は東京都千代田区番町・麴町地区を対象に、歴史文化に関する情報の時空間表現手法を提案し、地域史の具体的な状況を可視化する。提案した表現手法を用いて、対象地に居住していた文人の時間的変化と空間的分布を表現し、既存の文献では把握することができない独自の考察を行った。

キーワード: 地域史, 時空間, 表現手法, 千代田区

1. はじめに

(1) 研究背景・目的

千代田区番町・麴町は明治維新後、多くの幕臣が江戸を去り、屋敷が空き家となった。その空き家には中流から上流の人々が集まって住むようになるが、関東大震災や東京大空襲、高度経済成長により、武家屋敷の街並みは失われる。現在は住宅が多い地域であると同時に、大使館・公的機関・ホテル・オフィス等、多様な施設がある。

新井巖は「番町麴町『幻の文人町』を歩く」¹⁾で、明治から昭和にかけて番町・麴町地区に文人が多く集まっていた事実をまとめている。そのことは現在の街並みからは感じるができないが、数多くの文人がこの地区で活動していたという。

番町麴町に限らず、地域史の知見は深い知識を持つ一部の専門家や郷土史家の中に偏在しており、一般的に理解しやすい形では共有されていない。専門家による地域の歴史把握は、時代背景をベースにして個別エピソード同士が相互に関係を持って構成されていると考える。その把握の中では、時空間が統合されていると考えられるが、人間の頭の中では曖昧さが残り、何よりも他者との共有が困難である。

地域史に関する情報をGISシステム上に展開整理すれ

ば、専門家の歴史把握に近い地域史の構成を可視化し、広く共有できることが考えられる。

そこで本研究は、GISを用いて歴史的情報の時空間表現手法を提案し、地域史の具体的な状況を可視化する。また、この手法を用いて東京都千代田区番町・麴町地区を対象に地域史の時空間的な考察をすることを目的とする。

(2) 研究方法

はじめに千代田区番町・麴町地区に関する歴史的情報を収集し、位置情報と時間情報に着目してデータを整理・分類する。次に、位置と存続期間が確定しているデータを一括して概観できる表現手法を提案する。その後、提案手法を用いて地域の考察を行う。さらに提案した手法についての考察を行う。

2. 対象範囲

本研究では、主に新井巖「番町麴町『幻の文人町』を歩く」にまとめられた情報を取り扱うことから、同書で取り扱われている「番町・麴町」とその周辺地域として、現在の千代田区九段南、三番町、四番町を中心とした領域を対象とする(図-1)。



図-1 対象範囲

3. 表現手法の提案

(1) 時空間表現の原理

歴史的情報は、①出来事の名義、②出来事が発生した位置情報、③出来事が発生した時間情報をもつ。ここでは歴史的情報として人物の居住を取り上げ、その人物の居住地と居住期間を表現する。

位置情報は平面図上の居住地を示すが、時間情報については居住開始（転入または生誕）から居住終了（転出または死没）までの時間の幅を持つ。この時間幅は平面図を1年ごとにZ軸方向に積み重ねて表現する。位置と存続期間の情報が確定していれば、GISシステム上で歴史的情報を時空間的に表現できる。本研究では既存のGISシステムを用いるため、時間軸を擬似的な標高データに変換して表現する。居住開始年を基準高度とし、居住終了までの期間を標高値とする。

居住期間が1年未満の事例は、存続期間0とすると、GISシステム上表現ができないことから1年に切り上げる。

図-2は提案する時空間表現の概念図である。

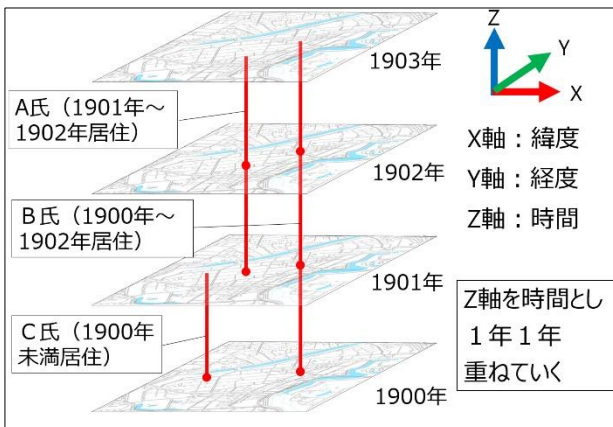


図-2 歴史的情報時空間表現の概念図

(2) 不完全データの取り扱い

(1)で述べた提案手法では位置情報及び開始・終了年の情報が必要となるが、歴史的情報のうち、それらのいくつかは不明・曖昧であるものがある。地域史を理解する上で、不完全なデータを除いた地域考察は不十分となり適切ではない。一方、歴史的情報は一般的な都市に関する統計データのような補充ができないため、一定期間内で曖昧さを保持したままデータを取り扱う必要がある。

本研究では、位置・時間の情報が揃っているデータを対象として取り扱うほか、開始・終了年が曖昧であるデータについては曖昧さを残して表現する。データの曖昧さは、表現上一定の期間内で透過性を変えてグラデーションとして表現する。

開始・終了年に関する情報が不完全なデータは、次の①～④の4つのタイプに分類することができる。

タイプ① 開始年はわかるが、終了年が不明である。

タイプ② 開始年がわかり、終了年の手がかりになる記述がある。

タイプ③ 終了年がわかり、開始年の手がかりになる記述がある。

タイプ④ 開始年と終了年が共に不明であるが、期間の手がかりになる記述がある。

本研究では、上記の4つのタイプに表現の基本ルールを定め、それに合わせて表現する。基本ルールは以下の通りである。

a) 位置情報と開始・終了年の全ての項目が判明しているデータを集計したところ、期間の中央値が4年であったことから、曖昧さの範囲を4年と設定し、1年毎に透過性を変え、徐々に消えていくような表現にする。

b) 個々のデータの終了時期の手がかりになる記述から曖昧さを表現する期間を設定する。

c) 個々のデータの開始時期の手がかりになる記述から曖昧さを表現する期間を設定する。

d) 個々のデータの期間の手がかりになる記述から曖昧さを表現する期間を設定する。期間の設定が困難な場合、記述から基準年の推定を推測し、a)のルールを適用する。

これらに従い時空間表現を作成した（図-3～図-7）

4. 考察

(1) 提案した手法に基づく地域の考察

時空間表現から番町・麹町地区の地域史を時間的変化に特徴のある箇所（多くのデータが集まる、消える、短いデータがある、長いデータがある等）と空間的分布に特徴のある箇所（多くのデータが集まる、消える、短いデータがある、長いデータがある等）に着目し、考察する。

b)空間的分布の特徴に着目

六番町に着目すると(図-7), 1920年頃は他の年代に比べて文人が集中していることが確認できる。図-7のa部を確認してみると, 六番町20に神西清, 六番町5に泉鏡花, 六番町3に有島武郎, 有島生馬, 里見淳, 森雅之, 六番町1に島木赤彦が住んでおり, 1920年頃には7人もの文人が六番町に集まっていることがわかる。

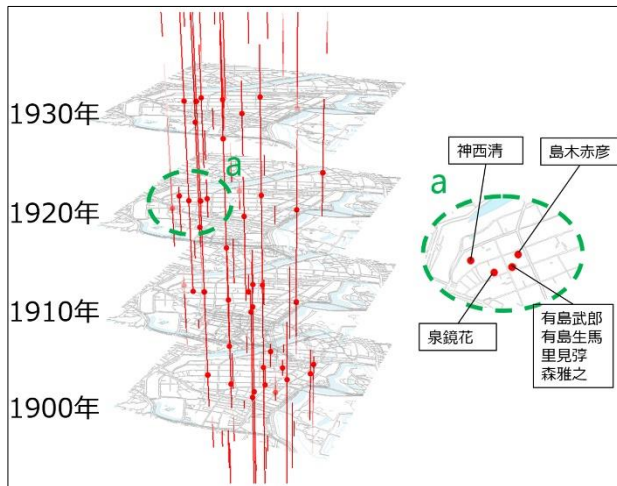


図-7 六番町地区における 1920 年前後の文人集中

c)まとめ

1868年頃から番町・麴町地区に文人が住み始めるようになり, 1884年から1900年は, 武者小路実篤や有島武郎らの入居, 平塚らいてうや小山内薫らの転居, 国木田独歩や与謝野鉄幹らの番町・麴町地区内での入転居など, 文人の入転居が多いことが特徴としてあげられる。その後も文人が増加し, 1937年には20~23人の文人が転居し文人町として全盛期を迎えるが, 太平洋戦争による戦災により, 文人が減り始めた。1965年頃からは高度経済成長により, オフィスビルやマンションの林立する町並みに変貌し, 武家屋敷を好んで居住地としていた文人が減ったと考えられる。また1920年頃の六番町は, 他の地区・年代に比べて, 文人が多いことが判明した。

こうした事実はわかってしまえば当たり前のことのように見えるが, ここで提案した時空間表現より時間軸を通じた考察や他地区との比較により客観的かつ明確に判断できるようになったものである。

(2)提案した手法についての考察

歴史的情報の位置と存続期間の情報を一括して概観できる手法は今まで確立されていなかったが, 本研究では, GISを用いて, 位置と存続時間を3次的に一括して概観する手法を提案した。

この手法では, 位置と存続時間が確定していれば, 歴史的情報を3次的に可視することができる。また, 歴史的情報の位置は分かるが存続期間が曖昧であったり, 欠落しているデータに関しては, 一定の期間内で曖昧さ

を保持し, 擬似的に完全なデータとして取り扱い, 提案した手法に実装した。これにより地域の時間的変化や空間的分布を視覚的に表現し, それに基づいて地域を考察することが可能である。

5. まとめ

(1)結論

歴史的情報の位置と存続期間を3次的に概観する手法を提案し, 東京都千代田区番町・麴町地区を事例に可視化した。また, 存続期間が曖昧なデータに関しては, 曖昧さを保持したまま表現する手法を提案した。

提案した手法による表現から, 対象地に1870年~1970年頃に居住した文人についての時間的変化と空間的分布に関する考察を行った。

(2)今後の課題

本研究では, 位置情報と存続期間がわかるデータ, 位置情報はわかるが存続期間が曖昧なデータを扱い地域の考察を行った。本研究では扱わなかった位置情報が不確定で存続期間が確定しているデータ, 位置情報と存続期間共に不確定であるデータと共に地域を考察することで, 新たな地域史の解釈を深めることができると考えられる。よって, これらのサンプルに関しても情報の曖昧さを保持したままデータを取り扱う表現方法を提案し, 時空間表現に実装することが今後の課題である。

参考文献

- 1) 新井巖: 番町麴町「幻の文人町」を歩く, 彩流社, 2008

本研究は平成27年度千代田学「千代田区デジタルアトラスの活用~歴史文化と賑わいの可視化~」の助成を受けて実施されたものです。